

# 日英露語のアスペクト体系と結果表現の関係

## —2 種類のアスペクト限定—

スバチェワ・インナ・ペトロヴナ

キーワード：アスペクト限定、結果構文、移動構文、接頭辞、複合動詞

### 1. はじめに

本稿では、結果表現（ここでは結果構文と着点句を含む移動構文の総称とする）に基づき、日英露語のアスペクト限定について考察する。英語のアスペクトに関する先行研究で同じアスペクト限定法として捉えられてきた構文を、日本語とロシア語の事実に基づき、2 種類に分けるべきであることを主張する。

英語では、全てのアスペクト限定法において、動詞の形が変わらない。そのため、先行研究 (Tenny (1994), Rosen (1999) など) では、以下の全てのアスペクト限定法が、動詞の telicity を変える構文として登場する。

#### (1) 経路の目的語

- a. John walked {for an hour /\*in an hour} .
- b. John walked the trail in an hour.

#### (2) 同族目的語

- a. Josie danced {for an hour /\*in an hour} .
- b. Josie danced a silly dance in five minutes.

#### (3) 目的語の特定

- a. Chuck ate apples {for an hour /\*in an hour} .
- b. Chuck ate the apple {\*for an hour / in an hour} .

#### (4) 質量/可算目的語

- a. John melted ice {for an hour /\*in an hour} .
- b. John melted an ice cube {\*for a minute / in a minute} .

#### (5) 着点句

- a. Carmen walked {for an hour /\*in an hour} .
- b. Carmen walked to school {\*for an hour / in an hour} . (Tenny 1994)

#### (6) 結果述語

- a. Terry ran {for an hour /\*in an hour} .
- b. Terry ran us ragged {\*for an hour / in an hour} . (Rosen 1999)

しかし、日本語やロシア語では、(1) – (4) の構文と、(5) – (6) の構文とでは、動詞の振る舞いが異なる。最初の4つのアスペクト限定法では、日本語も英語と同じように活動動詞と達成動詞の形が変わらない。

- (7) a. 太郎が3キロの道を1時間で歩いた。  
 b. 太郎がおかしな踊りを5分で踊った。  
 c. 太郎がリンゴを1個食べた。  
 d. 太郎が氷の塊を解かした。

一方、結果構文では、活動動詞は達成動詞の解釈を得ることができず、必ず達成動詞が出現しなければならない。

- (8) a. John hammered the metal flat.  
 b. ?? ジョンが金属をペチャンコに叩いた。 Washio (1997)  
 c. 花子が金属を平らに叩き伸ばした。 Hasegawa (1999)

ロシア語の場合も、最初の4つのアスペクト限定法と移動構文・結果構文では、動詞の振る舞いが異なる。最初の4つの方法では、動詞を完了相にするだけでいいが、結果表現では、それだけでは不十分である。必ず位置変化か状態変化を含意する接頭辞が付かなければならない。

- (9) a. \*Ivan brosil myach v vorota.  
 Ivan threw PERF the ball into the goal  
 b. Ivan zabrosil myach v vorota.  
 Ivan za-threw PERF the ball into the goal  
 (10) a. \*Ivan pobil mal'chika do smerti.  
 Ivan po-hit PERF the boy till death  
 b. ??Ivan izbil mal'chika do smerti.  
 Ivan iz-hit PERF the boy till death  
 c. Ivan zabil mal'chika do smerti.  
 Ivan za-hit PERF the boy till death

さらに、結果表現の中の振る舞いも、言語ごとに異なる。英語では達成動詞と活動動詞のいずれの場合も、結果述語（着点句）が付加されても動詞はそのままの形で残るのに対し、日本語では、活動動詞の場合のみ、達成動詞などが付かなければならない。また、ロシア語では、いずれの場合も、接頭辞の付加により、動詞が不完了相から完了相に変わる。

- (11) a. Mary dyed the dress pink.  
       b. John hammered the metal flat.
- (12) a. メアリがドレスをピンクに染めた。  
       b. 花子が金属を平らに叩き伸ばした。
- (13) a. Ivan *postiral* *rubashku* *nabelo*.  
       Ivan po-washed shirt white  
       b. Ivan *zabegal* *krosovki* *do* *dyr*.  
       Ivan za-ran Nikes till holes

本稿では、アスペクト限定法を 2 種類 (*telicity* と *boundedness*) に分ける先行研究に基づき、例(1)–(4)と、例(5)–(6)のアスペクト限定法がそれぞれ *boundedness* と *telicity* を限定する方法であると主張する。

そして、英語と日露語の違いは、*telicity* の変更の仕方にあると考える。つまり *telicity* が変わるときに、*telic* 述語が加わるが、英語ではそれがゼロの形を持つのに対し、日露語では具現化した要素が挿入されることを示す。

さらに、ロシア語におけるアスペクト・ペアは、先行研究では英語の動詞内在アスペクトの *telic/atelic* の対立と英語の *perfect/continuous tense* の対立と比較されるが、本稿では(不)完了化の種類によりアスペクト・ペアの役割が異なると主張する。語彙接頭辞による完了化は *telicity* を変え、その他の(不)完了化は *boundedness* を変えると主張する。

本稿の構成は以下になる。2 節では、アスペクト限定に関する先行研究を概観し、本稿の立場を述べる。3 節では、日本語のアスペクト体系における 2 種類のアスペクト限定について考察し、先行研究における日英語の結果構文に関する統語的分析を紹介する。4 節では、ロシア語の結果構文について説明し、日英語と比較する際生じる問題点を提示する。5 節では、ロシア語のアスペクト体系における 2 種類のアスペクト限定について述べ、結果構文の分析に応用する。6 節はまとめである。

## 2. アスペクト限定に関する先行研究

本節では、アスペクト限定に関する先行研究を概観し、本稿の立場を述べる。

英語のアスペクトに関する研究の基盤を立てたのは、Vendler (1957) である。Vendler は英語の動詞を4つのタイプに分けた。

- (14) a. STATES (状態動詞): know the answer, stand in the corner  
       b. ACTIVITIES (活動動詞): run, eat, eat apples, eat soup  
       c. ACCOMPLISHMENTS (達成動詞): run a mile, eat an apple  
       d. ACHIEVEMENTS (到達動詞): reach the summit

この動詞分類をより詳しく位置付けるために、先行研究では様々な素性が考案された。例えば、Smith (1991) では、3つの素性 (stative、durative、telic)、Verkuyl (1993) では2つの素性 (continuousness と boundedness) が提案された。その他にも、素性を使って、Vendler の動詞分類を詳解する研究があるが、ほとんどの先行研究は、telicity と boundedness を同様の現象として扱っている。

そして、動詞のtelicity (=boundedness) を変える方法として、すでに1節で触れた(1) – (6) の構文が挙げられる。

それに対し、Dowty (1977) が、このような捉え方に関する問題点を提示した。Dowty の用語でいう「未完了パラドックス」である。たとえば、“John was drawing a circle” のような例文では、進行形によって、動詞の内的終了時点が解除されるため、“a circle” の登場により達成動詞になった “draw” はもはや達成動詞ではなくなるというパラドックスが生じる。

その問題の解決法として、Depraetere (1995) が動詞内在のアスペクト (終了時点) と構文によるアスペクト解釈を分けて考えることと提案した。

Depraetere は内的終了時点に基づく telicity と事実上の限界性に基づく boundedness を分けて考える必要があると主張した。(15) のように、telic と atelic 動詞がそれぞれ bounded と unbounded 読みを持てるということである。

(15) (I) + 内的終了時点 (telic)

a.+限界 (内的終了時点に達した場合) (bounded)

b.-限界 (内的終了時点に達していない場合) (unbounded)

(II) - 内的終了時点 (atelic)

a.+限界 (bounded)

b.-限界 (unbounded)

構文が telic の場合、その構文に描かれる状況は自然的 (または予定される) 終了時点を持ち、描かれる状況が終了するためにその時点に達しなければならない。終了時点に達すると、描かれる状況は続くことはできない。この条件を満たさない構文は atelic である。(16a)、(16b)、(16c) は telic であり、(16d)、(16e) は atelic である。

(16) a. The bullet hit the target.

b. Sheila collapsed.

c. Sheila deliberately swam for 2 hours.

d. Sheila is working in the garden.

e. Sheila lives in Vienna.

Depraetere (1995)

Bounded の構文は、終了時点の有無に関わらず、時間的限界に達した状況を描く。時間的限界に達しない状況を描く構文は unbounded とされる。(17a) から(17d) までの例は bounded であり、(17e) と(17f) は unbounded である。

- (17) a. I met John at 5 o'clock.  
 b. Judith played in the garden for an hour.  
 c. Julian lived in Paris from 1979 until May 1980.  
 d. I have lived in Paris.  
 e. She lives on the corner of Russell Square.  
 f. She is writing a nursery rhyme. Depraetere (1995)

(17a) の動詞 “meet” は内的終了時点を持つため、進行形でない場合は、その終了時点と時間的限界が一致する。(17b) と (17c) では、時間的限界は時間副詞によって与えられる。(17d) では使用される perfect tense が描かれる状況に時間的限界を与える。進行形によって、boundedness は影響を受けるが、telicity は影響を受けない。

- (18) a. John opened the parcel. (telic bounded)  
 b. John was opening the parcel. (telic unbounded)  
 (19) a. Ten firecrackers exploded. (telic bounded)  
 b. Ten firecracker were exploding. (telic unbounded) Depraetere (1995)

また、Smith (1991) も、動詞内在アスペクトと perfect/continuous 対立を分け、前者を事象アスペクト、後者を視点アスペクトと呼ぶが、例(1) – (6)の構文は、Depraetere の考え方では、perfect/continuous 対立と同じように boundedness しか変えないのに対し、Smith の考え方では、perfect/continuous 対立と違い、事象アスペクト(telicity) を変えることになる。

本稿では、日本語とロシア語の事実に基づき、例(1) – (4)は perfect/continuous 対立と同じように boundedness を変え、例(5) – (6)は telicity を変える構文であると主張する。

### 3. 日本語におけるアスペクト限定の構文と動詞の形

本節では、日本語の事実に基づき、アスペクト限定の構文を 2 種類に分け、例(5) – (6)の特徴を示すために、日英語における結果構文の比較を行う。

1 節で観察したように、英語では先行研究で提示されているアスペクト限定法が動詞に対して同じ役割を持つ。それに対し、日本語では最初の 4 つのアスペクト限定法と最後の 2 つとは、動詞の振る舞いが異なってくる。最初の 4 つのアスペクト限定法では、日本語も英語と同じように活動動詞と達成動詞の形が変わらないが、結果構文（または移動構文）

では、活動動詞は達成動詞の解釈を得ることができず、必ず達成動詞が出現しなければならない。

最初の 4 つのアスペクト限定法は外の空間や時間的な限界によって行われるため、telicity ではなく、boundedness を変えるのに対し、結果構文や移動構文では、事象の内在的变化が加わるため、telicity を変えることを主張する。そして、英語と日本語の違いは、telicity の変更の仕方にあると考える。Telicity が変わるときに、telic 述語が加わるが、英語ではそれがゼロの形を持つのに対し、日本語では実際に動詞として挿入される。

次に、日英語の結果構文の比較により出来た結果構文の分類とその中の各種の統語構造に関する先行研究を概観する。

Washio (1997) では、結果構文の種類が強結果構文と弱結果構文に分けられている。(20) のように、動詞の意味に AP が表す結果が含意されている動詞は弱結果構文をなし、(21) のように、V の意味から結果状態を予測できない場合は強結果構文であるとされる。Washio は、英語では両方が存在するのに対して、日本語では弱結果構文しか存在しないと述べている。

- (20) a. Mary dyed the dress pink.  
b. メアリがドレスをピンクに染めた。
- (21) a. John hammered the metal flat.  
b. ?? ジョンが金属をペチャンコに叩いた。

それに対し、Hasegawa (1999) は日本語では強結果構文をなすメカニズムとして、複合動詞を挙げている。

- (22) 花子が金属を平らに叩き伸ばした。

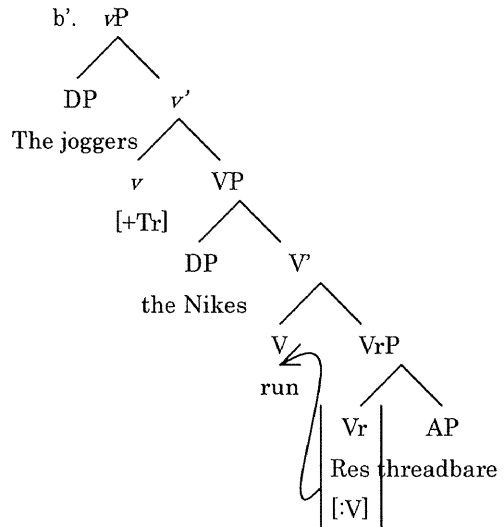
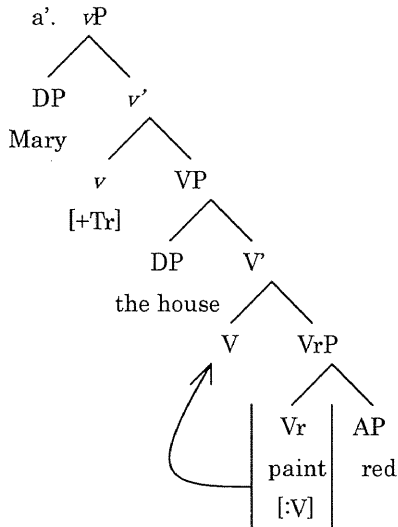
Hasegawa は、VP-shell 構造を使い、結果構文の統語構造を(23) のように想定している。V と結果句の間に結果述語の独立した投射が存在し、それを Hasegawa が VrP と名づけている。Vr は語彙概念構造でいう BECOME に相当し、Vr の主な役割は V が表す動作と AP/PP が表す状態/場所を結びつけることである。しかし、Vr が存在するだけでは不十分で、それが V に主要部移動したときだけ結果構文が可能となる。

(23) a. Mary painted the house red.

弱結果構文

b. The joggers run the Nikes threadbare.

強結果構文



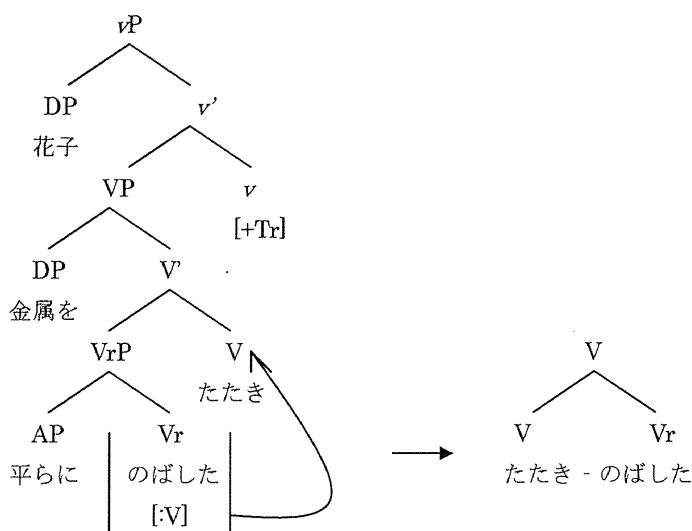
このメカニズムを用いて、Hasegawa (1999) は本来の達成動詞（弱結果構文をなす動詞）と、結果句による達成述語（強結果構文をなす動詞）の違いを説明している。本来の達成動詞の場合、 $Vr \rightarrow V$  移動が自動的である。それを保証できるのは、達成動詞が Vr に生成する事実のみである。一方、結果句による達成述語の場合、活動動詞が V の位置に生成され、結果句の含んだ VrP の主要部 Vr が移動してきたときだけ、達成述語になれる。

英語のような言語は Vr の位置で独立した抽象的な述語（Hasegawa の用語でいう Res）を持ち、活動動詞と結果句を結合させるために使用している。

日本語では、抽象的な Res がいないため、活動動詞が結果構文を許容できない。

しかし、日本語では、Res の役割を果たす達成動詞が存在する。(24) のように、「たたく」だけでは「平らに」という結果述語が出現できず、「伸ばす」という V2 がその結果述語の出現を認可する。(24) が示すように、日本語では、V の位置では活動動詞が生成され、VrP の位置では、Res の代わりに実際の単語である達成動詞が生成される。

(24) 花子が金属を平らにたたきのばした。



以上、Washio (1997) と Hasegawa (1999) における日英語の結果構文に対する分析を概観した。

そして、ロシア語の結果構文におけるアスペクト限定も接頭辞によるものなので、日本語と同じように、telicity が変わるときに、telic 述語が具現化した形（接頭辞）として挿入されると考えられる。

しかし、ロシア語の場合、強結果構文も、最初の 4 つのアスペクト限定法も接頭辞を使うものなので、ロシア語における telicity と boundedness と接頭辞との関係をさらに検討する必要がある。

#### 4. ロシア語の結果構文

本節では、ロシア語の結果構文について説明し、日英語と比較する際生じる問題点を提示する。

先行研究 (Spencer and Zaretskaya (1998)、Strigin (2004) など) では、ロシア語には、英語のような結果構文が存在せず、英語で二次述語が担う役割を接頭辞が果たすとされているが、本稿では、ロシア語にも二次述語を持つ結果構文が存在し、接頭辞が日本語の複合動詞と同様その二次述語の出現を認可するV主要部であるという立場をとる。

まず弱結果構文について述べるが、先行研究の指摘通り、状態変化動詞は二次述語と共起しにくい。



- (25) a. \*Reka zamerzla natverdo.  
The river froze solid.  
b. \*Ivan postiral rubashku nachisto.  
Ivan washed the shirt clean.

しかし、動詞に含意された結果を強調する二次述語となら共起できる。(26) のように二次述語を繰り返し使うか、普通以上の結果を表す二次述語を使えば、結果構文が成立する。

- (26) a. Reka zamerzla tverdo·natverdo.  
The river froze solid-solid.  
b. Ivan postiral rubashku chisto·nachisto / nabelo.  
Ivan washed the shirt clean-clean / white.

この事実は Napoli (1992) で分析されたイタリア語の結果構文に近い。イタリア語の結果構文にも同じ現象が見られ、Napoli は、イタリア語の結果構文が成立するのは主動詞が表す自然な終着点 (natural endpoint) を際立たせる場合に限られると述べている。

強結果構文は、ロシア語では、接頭辞によって形成される。(27) のように、接頭辞は具現化されない結果を含意しているため、先行研究の指摘通り英語の不変化詞に近い。

- (27) a. Ivan zalil tvety.  
Ivan washed the flowers (damaged).  
b. Ivan zaezdil dorogu.  
Ivan rode the road (damaged).

しかし、不変化詞と違い、接頭辞は具現化した結果を表す二次述語と共起できることから、その統語的役割は異なる。ロシア語の接頭辞が二次述語の出現を認可する V 主要部であるのに対し、不変化詞自体は二次述語の位置に生成され则认为られる。

- (28) a. Ivan zalil tvety nasmert'.  
Ivan washed the flowers dead.  
b. Ivan zaezdil dorogu do yam.  
Ivan rode the road till holes.

- (29) a. ?\*John broke the vase down into pieces.  
b. ?\*John wore his Nikes out threadbare.

以上、ロシア語における弱結果構文と強結果構文を観察した。ロシア語の接頭辞は日本語の複合動詞の V2 と同じ役割を果たすと述べたが、日本語と違い、ロシア語の結果構文は両方とも接頭辞を利用していることが分かる。

本稿では、2つの結果構文の種類に用いられる接頭辞の種類が異なり、その統語的役割や生成する位置も異なることを示し、日本語の複合動詞の V2 に相当するのは強結果構文の接頭辞のみであることを主張する。

## 5. ロシア語におけるアスペクト限定

本節では、ロシア語におけるアスペクト限定と接頭辞の関係について述べ、弱結果構文と強結果構文に登場する接頭辞の違いを説明する。

ロシア語のアスペクトに関する先行研究では、文法的アスペクト(いわゆるアスペクト・ペア)が問題の中心となっている。ロシア語の動詞は全て2つのアスペクト(完了相と不完了相)の形を持つ。先行研究では、そのアスペクト・ペアについて、主に2つの立場が存在する。完了相／不完了相の対立が Vendler (1957) の *telic/atelic* の対立に相当するという立場 (Brecht (1985), Paducheva (1996) など) と、完了相／不完了相の対立が英語の *perfect/continuous* 対立に相当するという立場 (Smith (1991)) である。

本稿では、(不)完了化の種類によりアスペクト・ペアの役割が異なると主張する。

先行研究 (Babko-Malaya (1999), Svenonius (2004)) では、ロシア語のアスペクト・ペアにおける完了の意味をもたらす接頭辞は3つの種類に分けられている。つまり、*pure perfectivizing prefixes* (単純完了化接頭辞), *lexical prefixes* (語彙接頭辞) と *superlexical prefixes* (超語彙接頭辞) である。

単純完了化接頭辞は (31) の “na” のように、動詞によって表されるイベントが終了されたことを意味するものである。

- |  |   |
|--|---|
| <p>(30) Ivan pisal pismo.<br/>Ivan write-IMP letter-ACC<br/>Ivan was writing a letter.</p> | <p>(31) Ivan <i>napisal</i> pismo.<br/>Ivan na-write-PERF letter-ACC<br/>Ivan has written a letter.</p> |
| Babko-Malaya (1999)  |   |

語彙接頭辞はイベントの完了だけではなく、結果状態も含意している。

- |   |  |
|---|--|
| <p>(32) Ivan kopal zeml'u.<br/>Ivan dug-IMP ground-ACC<br/>Ivan was digging the ground.</p> | <p>(33) Ivan <i>vykopal</i> klad.<br/>Ivan vy-dug-PERF treasure-ACC<br/>Ivan dug out the treasure.</p> |
| Babko-Malaya (1999)   |  |

単純完了化接頭辞と語彙接頭辞の違いの一つは選択制限である。単純完了化接頭辞が付いている動詞は(30)–(31)のように動詞語幹と同じ選択制限を持つのに対し、語彙接頭辞が付いている動詞は異なる項構造を持つ。(32)–(33)では、接頭辞の付いていない動詞“kopat”（掘る）と語彙接頭辞が付いている動詞“vykopat”（掘り出す）の選択制限の違いがはっきりしている。

以上の事実から分かるように、単純完了化接頭辞は英語の perfect/continuous 対立と同じ役割をもち、boundedness のマーカーであるのに対し、語彙接頭辞は日本語の複合動詞のように、新しい単語を作り上げ、動詞の意味とともに telicity も変えるのである。

超語彙接頭辞は他の言語のアスペクト動詞や副詞句に相当するものであり、中には“za”（はじめる）、“do”（終わる）、“po”（少しする）、“pro”（長い時間にわたってする）というものがある。

- (34) a. *zapisat'* PERF 'to begin writing'  
b. *popisat'* PERF 'to write for a while' Babko-Malaya (1999)

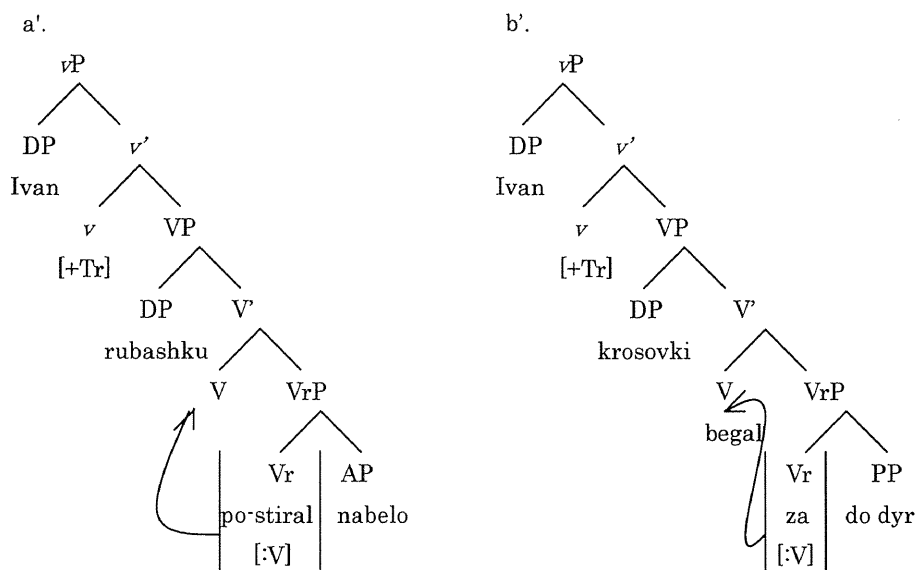
この種の接頭辞は、動詞に付くが、英語のアスペクト動詞 (begin, finish など) と同じように構文全体を修飾するため、動詞に直接影響を与えず、perfect/continuous 対立と同様 boundedness しか変えない。

そして、アスペクト限定の構文に使用される接頭辞は、最初の 4 つの構文では単純完了化接頭辞であり、(5)と(6)では語彙接頭辞であると考ええる。そのため、例(9)–(10)で紹介したように、活動動詞を使用した結果構文と移動構文では単純完了化接頭辞によるアスペクト限定が不適格である。

一方、達成動詞による弱結果構文に登場する接頭辞は単純完了化接頭辞であると主張する。ロシア語のアスペクト体系の特徴として、全ての動詞が完了相と不完了相の形を持つが、達成動詞の場合、それが英語の時制の perfect/continuous 対立がもたらす bounded/unbounded 読みであると考ええる。

以上のことから、ロシア語における 2 種類の結果構文の構造を (35) のように想定できる。

- (35) a. Ivan *postiral rubashku nabelo*.      b. Ivan *zabegal krossovki do dyr*.



単純完了化接頭辞は達成動詞に付加して生成される。一方、語彙接頭辞の場合、V1 の位置に生成される主動詞に対し、接頭辞は単独で Vr の位置で生成され、結果二次述語の出現を認可する役割を果たす。

以上の分析から、ロシア語でも日本語と同様、強結果構文をなすために、結果述語を認可する具現化した要素が必要であることが明らかになる。

## 6. まとめ

本稿では、アスペクト限定法を 2 種類 (telicity と boundedness) に分け、例(1) – (4)と、例(5) – (6)のアスペクト限定法がそれぞれ boundedness と telicity を限定する方法であると主張した。そして、英語と日露語の違いは、telicity の変更の仕方にあると考える。3ヶ国語とも、telicity が変わるときに、telic 述語が加わるが、英語ではそれがゼロの形を持つのに対し、日露語では具現化した要素が挿入されることを示した。

さらに、ロシア語におけるアスペクト・ペアは、先行研究では英語の動詞内在アスペクトの telic/atelic の対立と英語の perfect/continuous tense の対立と比較されるが、本稿では(不)完了化の種類によりアスペクト・ペアの役割が異なると主張した。語彙接頭辞による完了化は telicity を変え、その他の(不)完了化は boundedness を変えることを示した。

# 【参考文献】

- 小野尚之 (2007) 「結果構文をめぐる問題」 小野尚之 (編) 『結果構文研究の新視点』 1-31, ひつじ書房
- 金田一春彦 (1976) 「国語動詞の一分類」 金田一春彦 (編) 『日本語動詞のAspect』 5-26, むぎ書房に再録
- 工藤真由美 (1995) 『Aspect・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書房
- Babko-Malaya, Olga (1999) *Zero Morphology: a Study of Aspect, Argument Structure and Case*. Ph.D. dissertation. University of Rutgers.
- Brecht, R. D. (1985) The form and function of aspect in Russian. In Michael S. Flier & Richard D. Brecht (eds.), *Issues in Russian morphosyntax*, 9-34. Columbus, OH: Slavica.
- Depraetere, Ilse (1995) On the necessity of distinguishing between (un)boundedness and (a)telicity. *Linguistics and Philosophy* 18 : 1-19.
- Dowty, David (1977) Toward a semantic analysis of verb aspect and the English 'imperfective' progressive. *Linguistics and Philosophy* 1 : 45-77.
- Hasegawa, Nobuko (1999) The Syntax of Resultatives. In Masatake Muraki & Enoch Iwamoto (eds.), *Linguistics: In Search of the Human Mind*, 178-208. Kaitakusha.
- Napoli, Donna Jo (1992) Secondary Resultative Predicates in Italian. *Journal of Linguistics* 28 : 53 - 90.
- Paducheva, E.V. (1996) *Semanticheskie Issledovanija*. Moscow : Yazyki Russkoi Kultury.
- Rosen, S.T. (1999) The Syntactic Representation of Linguistic Events. *GLOT International* 4 (2) : 3-11.
- Smith, Carlota (1991) *The Parameter of Aspect*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Spencer, Andrew and Marina Zaretskaya (1998) Verb prefixation in Russian as lexical subordination. *Linguistics* 36 : 1-39.
- Strigin, Anatoli (2004) Blocking resultative secondary predication in Russian. *ZAS Papers in Linguistics* 36 : 1-84.
- Svenonius, Peter (2004) Slavic Prefixes inside and outside VP. In Peter Svenonius (ed), *Nordlyd 32.2: Special issue on Slavic prefixes*, 205-253. University of Tromsø.
- Tenny, Carol (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht: Kluwer.
- Vendler, Zeno (1957) Verbs and times. *Philosophical Review* 56 : 143-160.
- Verkuyl, H.J. (1993) *A theory of aspectuality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6 : 1-49.